

『閑居友』(一) 岩瀬文庫本翻刻と諸本対校

原 田 行 造
藤 島 秀 隆*

(*金沢工業大学助教授)

はじめに

かの承久の乱直後に完成した『閑居友』には、中世隠者の特異な相貌が最も典型的に形象化されている。それは、編者慶政が当時としては類を見ない独創性を尊ぶ純粋な文芸意識を有していたこと、彼が天台華嚴の教に深く帰依して、ひたすらに往生を希求する隠者を描き、後世に伝えようとする使命感を有していたこと等の所産である。本書の編者については、かつて慈円説も提唱されたことがあるが、建保五年に慶政の在宋を証拠づける「波斯文書」の存在と、彼が西山の草庵に八年をすごして来たとする上巻三話の記述との間に横たわっていた矛盾は、彼の西山隠棲が承元二年(一一〇八)と判明するや、完全に解消した。そして、本書の特異な成立過程が解明されて、上巻三話・同二話・同一話・同四話・同五話……の順に執筆された事実が判明して来ると、次々に興味深い課題が登場して来た。即ち筆者と鴨長明との人間関係や『発心集』に対する評価の問題や、更に慶政が梶尾の明恵上人らとの交渉を通して展開した仏教活動への分析などがそれである。また、天台思想に熱烈に傾倒する彼が、長明の信奉する浄土教的世界と明恵の重んじた釈迦仏尊重の華嚴宗とにいかに対処していたか、そして、その軌跡が本書にどのような投影しているのかを追究することもまた重要なテーマである。

『閑居友』に関する研究は、永井義憲博士の「閑居友の作者成立及び素材について」(大正大学紀要・第40輯・昭和30年1月)に見られる先駆的御論考をはじめとして、小林保治氏の「『閑居友』序説」(一)(四)(早稲田大学教育学部学術研究・第16171820・昭和42434446年)における基礎的研究や平林盛得氏の「慶政上人伝考補遺」(国語と国文学・昭和45年6月・第47巻第6号)で考究された作家

研究などにより、新しい段階を迎えるに至った。これら諸先学の研究に立脚しつつ、昨冬「金沢古典文学研究会」の研究誌「説話・物語論集」(創刊号・昭和47年12月)にて「閑居友」特集(論文四篇・全注釈(一))所収が刊行されるに至った。また本年再び同誌は「閑居友」第二特集(論文五篇、うち一篇は「方丈記」・全注釈(二))を企画し、説話文学会金沢大会の初日十月二十七日に発刊された。更に、本書は本学をはじめ大阪大学・立教大学・静岡女子短期大学などにて演習用にとりあげられ、近くは二三の大学でもその対象として選定すると聞く。

如上の研究上の諸状況を加味し、ここに『閑居友』の本文校訂の重要性を認識して、その作業に着手するに至った。具体的には、岩瀬文庫本を底本にして、数本を以て校合を試みたわけであるが、この本文により、今後一段と精確な研究の進展に幾分たりとも寄与することができれば幸いである。

凡 例

一、本文は岩瀬文庫本を底本として、これに尊経閣蔵伝為相筆本・宮内庁書陵部本・尊経閣蔵譚玄本・神宮文庫蔵本・続群書類従本・版本(無刊記本)を以て校合した。

二、校異の部分に示した略号は、次の如くである。為——尊経閣蔵伝為相筆本、宮——宮内庁書陵部本、譚——尊経閣蔵譚玄本、神——神宮文庫蔵本、類——続群書類従本、版——版本(無刊記本)。

三、校合は、漢字・仮名の異同に至るまで徹視的に作業し、本文系統の究明に資することを意図した。ただし、明らかに意味を異にする場合以外は、異体字はその異同を示さないことを原則とする。

四、底本はその本文を忠実に再現し、歴史的仮名遣と異なる場合は（ ）を付して正しい形を示した。
五、底本に明らかな誤が存する場合、（ ）符号を付して訂正した。

六、底本に見られる誤記訂正の跡はそのまま翻刻した。また、○などを付して脱文の補記をしてある部分も、そのままの形で示した。

例 かゝりほとに

例 ものなく。仏性（仏性をそなえて待也。地獄餓鬼までもみな）なきものはひとりも

七、反復符号は底本通り「〳〵」を以て示すが、一字の場合は「々」でさし示した。

八、上巻第一話には、錯簡が存するが、正常に復元した形で各諸本を対校した。

九、表題は底本通り巻初に列挙し、更に各話のはじめにも特別に付した。この場合、巻初の部分で校異を示し、各話に付した表題では、それを省略した。

十、本文異同は、その重要度から二分類して提示した。即ち、本文中に標した数字を○でかこんだ形は、意味を異にするかそれに準ずるものであり、（ ）を付した場合は、単に文字の異同（漢字と仮名）や省略などにとどまり、意味内容まで規制していない箇所を意味する。

閑居友 上

真如親王天竺にわたりたまふ事⁽¹⁾

如幻僧都の発心の事⁽²⁾

玄寶僧都門おさして善珠僧正をいれぬ事⁽³⁾

空也上人あなものはかしやとわひたまふ事⁽⁴⁾

清海上人の発心の事⁽⁵⁾

あつまのひしりのてつから山おくりする事⁽⁶⁾

清水のはしのしたの乞食の説法事⁽⁷⁾

おしのまねしたる上人のまことの人に法文云事⁽⁸⁾

あつまのかたに不軽おかみける老僧の事⁽⁹⁾

覺弁法師涅槃經ときて高座にておはる事⁽¹⁰⁾

はりまの国の僧の心おこす事⁽¹¹⁾

あふみのいしたうの僧の世をのかる事⁽¹²⁾

かう野のひしりの山からによりて心をこす事⁽¹³⁾

常陸国のおとこ心をこして山にいる事⁽¹⁴⁾

するかの国うつの山にゐる僧事⁽¹⁵⁾

下野守義朝の郎等の心をこす事⁽¹⁶⁾

稲荷山のふもとに日をゝかみて涙おなす入道事⁽¹⁷⁾

あやしの入道空也上人南無阿弥陀仏みかはの入道南無阿みた仏となふる事⁽¹⁸⁾

あやしの僧の宮つかへのひまに不浄観をこらす事⁽¹⁹⁾

あやしのおとこ野はらにてかはねをみて心をこす事⁽²⁰⁾

からはしかはらの女のかはねの事⁽²¹⁾

〔校異〕（1）わたり渡り（神）（2）たまふ給ふ（譚・神・類・版）（3）こと事（譚・神・類・版）（4）門お門を（宮・譚・神・類・版）

（5）善珠僧正を善珠僧正お（為）善珠僧都を（譚・神・類・版）（6）いれぬ入ぬ（神）（7）もの物神（8）わひたまふ給ふ（神）

（9）わひたも類（9）ひしりのひしり（譚・神・類・版）（10）山おくり（神）（11）はしのした橋の下（神）（12）説法（神・類・版）（13）おし譚（お）の傍にを敷と記す（神）

（14）上人のまことの上人誠の（神）（15）あつま東（神）（16）おかみける（譚・類・版）（17）おはる（神）（18）おはる（神）（19）心おこす（宮）（20）心おこす（宮）（21）心おこす（宮）

（22）心おこす（宮）（23）心おこす（宮）（24）心おこす（宮）（25）心おこす（宮）（26）心おこす（宮）（27）心おこす（宮）（28）心おこす（宮）（29）心おこす（宮）（30）心おこす（宮）（31）心おこす（宮）（32）心おこす（宮）（33）心おこす（宮）（34）心おこす（宮）（35）心おこす（宮）（36）心おこす（宮）（37）心おこす（宮）（38）心おこす（宮）（39）心おこす（宮）（40）心おこす（宮）

（41）心おこす（宮）（42）心おこす（宮）（43）心おこす（宮）（44）心おこす（宮）（45）心おこす（宮）（46）心おこす（宮）（47）心おこす（宮）（48）心おこす（宮）（49）心おこす（宮）（50）心おこす（宮）

（51）心おこす（宮）（52）心おこす（宮）（53）心おこす（宮）（54）心おこす（宮）（55）心おこす（宮）（56）心おこす（宮）（57）心おこす（宮）（58）心おこす（宮）（59）心おこす（宮）（60）心おこす（宮）

（61）心おこす（宮）（62）心おこす（宮）（63）心おこす（宮）（64）心おこす（宮）（65）心おこす（宮）（66）心おこす（宮）（67）心おこす（宮）（68）心おこす（宮）（69）心おこす（宮）（70）心おこす（宮）

（71）心おこす（宮）（72）心おこす（宮）（73）心おこす（宮）（74）心おこす（宮）（75）心おこす（宮）（76）心おこす（宮）（77）心おこす（宮）（78）心おこす（宮）（79）心おこす（宮）（80）心おこす（宮）

（81）心おこす（宮）（82）心おこす（宮）（83）心おこす（宮）（84）心おこす（宮）（85）心おこす（宮）（86）心おこす（宮）（87）心おこす（宮）（88）心おこす（宮）（89）心おこす（宮）（90）心おこす（宮）

（91）心おこす（宮）（92）心おこす（宮）（93）心おこす（宮）（94）心おこす（宮）（95）心おこす（宮）（96）心おこす（宮）（97）心おこす（宮）（98）心おこす（宮）（99）心おこす（宮）（100）心おこす（宮）

（101）心おこす（宮）（102）心おこす（宮）（103）心おこす（宮）（104）心おこす（宮）（105）心おこす（宮）（106）心おこす（宮）（107）心おこす（宮）（108）心おこす（宮）（109）心おこす（宮）（110）心おこす（宮）

（111）心おこす（宮）（112）心おこす（宮）（113）心おこす（宮）（114）心おこす（宮）（115）心おこす（宮）（116）心おこす（宮）（117）心おこす（宮）（118）心おこす（宮）（119）心おこす（宮）（120）心おこす（宮）

（121）心おこす（宮）（122）心おこす（宮）（123）心おこす（宮）（124）心おこす（宮）（125）心おこす（宮）（126）心おこす（宮）（127）心おこす（宮）（128）心おこす（宮）（129）心おこす（宮）（130）心おこす（宮）

（131）心おこす（宮）（132）心おこす（宮）（133）心おこす（宮）（134）心おこす（宮）（135）心おこす（宮）（136）心おこす（宮）（137）心おこす（宮）（138）心おこす（宮）（139）心おこす（宮）（140）心おこす（宮）

（141）心おこす（宮）（142）心おこす（宮）（143）心おこす（宮）（144）心おこす（宮）（145）心おこす（宮）（146）心おこす（宮）（147）心おこす（宮）（148）心おこす（宮）（149）心おこす（宮）（150）心おこす（宮）

（151）心おこす（宮）（152）心おこす（宮）（153）心おこす（宮）（154）心おこす（宮）（155）心おこす（宮）（156）心おこす（宮）（157）心おこす（宮）（158）心おこす（宮）（159）心おこす（宮）（160）心おこす（宮）

（161）心おこす（宮）（162）心おこす（宮）（163）心おこす（宮）（164）心おこす（宮）（165）心おこす（宮）（166）心おこす（宮）（167）心おこす（宮）（168）心おこす（宮）（169）心おこす（宮）（170）心おこす（宮）

（171）心おこす（宮）（172）心おこす（宮）（173）心おこす（宮）（174）心おこす（宮）（175）心おこす（宮）（176）心おこす（宮）（177）心おこす（宮）（178）心おこす（宮）（179）心おこす（宮）（180）心おこす（宮）

（181）心おこす（宮）（182）心おこす（宮）（183）心おこす（宮）（184）心おこす（宮）（185）心おこす（宮）（186）心おこす（宮）（187）心おこす（宮）（188）心おこす（宮）（189）心おこす（宮）（190）心おこす（宮）

一、真如親王天竺にわたりたまふ事

(41) おとこ男(神)(42) 野はら→野原(神)(43) みて↓見
て(神)(44) 心をくす↓心をおこす(譚・類・版) 心を発す
(神)(45) かはら→河原(神)

昔、真如親王といふ人いまそかりけり。ならの御門ノ第三の御子也。いまたかしらおろしたまはぬさきには、たかおかの親王とそ申ける。かさをとしまひてのちは、道詮律師にあひて、三論宗をきはめ、弘法大師にしたかひて真言おならひ給けり。法門ともにおほつかなきことおほしとて、つるにもろこしにそわたり給ける。宗叡僧正と、もなひ給けるか、宗叡は文殊のすみ給五台山おかまんとてゆきたまふ。親王は、ものならふへき師をたつね給けるほとに、昔このやまとの国の人にて円載和尚といひし人の唐にとまりたりけるか、親王のわたり給よしをきつて、御門に奏たりければ、御門あはれみて法味和尚といふ人におほせつけられて学問ありければ、心にもかなはさりければ、つるに天竺にそわたりたまひにける。錫杖おつきて、あしにまかせてひとりゆく。ことほりにもすきてわつらひおほしなと侍をみるにも、かなしみのなみたかきやりかたし。玄奘法師などのむかしのあとにおもひあはするにも、さこそはけはしくあやうく侍けめとあはれなり。さて、返給へきほともすきぬれば、いきしにわきまへかたしとて、こまかにそたつねありける。もろこしの返事に、天竺にわたり給ほとに、みちにたおはりたまふよしほのかにきくと侍けるにそ、はしめてたましるをうつし給よしをしりにける。

〔校異〕(1) いふ云(神)(2) けりける(神)(3) ならの↓南都の(神)(4) 御門ノ御門の(宮・譚・神・類・版)(5) 御子也↓おん子なり(類)(6) たまはぬ↓給はぬ(神)(7) さき↓先(神)(8) たかおか↓たかを(譚・類・版)たか岡(宮・神)(9) かさをと↓し↓かきりおと(為)かきりをおとし(宮・譚・類・版)かきり落し(神)(10) たまひてのちは↓給ひて後は(神)(11) あひて↓逢て(神)(12) したかひて↓随ひて(神)(13) 真言お↓真言を(宮・譚・神・類・版)(14) つるに↓ついに(為・宮・類)(15) もろこしにそわたり↓唐土

にそ渡り(神)(16) と、もなひ↓ともなひ(神・類・版)(17) すみ
住(神)(18) おかまん↓をかまん(宮)(19) ゆきたまふ↓行給ふ
(宮・譚・神)ゆき給ふ(類・版)(20) もの↓物(神)(21) 師を↓師お
(為)(22) 昔↓むかし(譚・類・版)(23) といひし人の唐に↓とてい
ひし人の唐に(為)と云シ人もろこしに(神)(24) わたり給よしをき
つて↓わたり給よしを聞て(譚)渡り給よしを聞て(神)(25) 奏た
り↓奏したり(神・類・版)(26) 御門ノ御心(為)(27) いふ云
(神)(28) おほせつけられて↓仰せ付られて(神)(29) 学問↓か
く問(宮)(30) あり有(神)(31) つるに↓ついに(為)終に神
(32) たまひにける↓給ひける(神)(33) 錫杖お↓錫杖を(宮・譚
・神・類・版)(34) あしに↓足に(神)(35) ひとり↓独り(神)
(36) すきてわつらひ↓過て煩ひ(神)(37) 侍を↓侍お(為)侍る
を(神)(38) みるにも↓みるに(神)(39) かなしみ↓かなしひ
(譚)(40) なみた↓涙(神)(41) むかしの↓昔の(為・宮)(42)
あと↓跡(神)(43) けはしく↓はけしく(神)(44) さて↓欠文(神)
(45) 返給へき↓かへり給へき(神・類・版)(46) すき↓過(神)
(47) わきまへ↓わきまある(為・宮)(48) たつねありける↓尋ね有
けり(神)(49) 返事に↓返事(神)(50) わたり↓渡り(神)(51)
みちにて↓道にて(為・宮・神)(52) おはり↓終り(神)(53) き
くと↓聞と(神)(54) たましるを↓たましるお(為)(55) うつし
↓移シ(神)

わたりたまひける道のようにに大かんしを三もちたまひたりける
を、つかれたるすかたしたる人いてきてこひければ、とりいて中
にもちいさきをあたへ給けり。この人、おなしくはおほきなるをあ
つからはやといひければ、我はこれにてすゑもかきらぬ道おゆくへ
し。汝はこゝのもとも人。さしあたりたるうへをふせきてはたりぬ
へしとありければ、この人菩薩の行はさる事なし。汝心ちいとし。
心ちいさき人のほとこすものをはうくへからすとて、かきけちうせ
にけり。親王あやしめて、化人の出来てわかつろをはかりたまひ
けるにこそとくやしくあちなし。さて、やうくすゑみゆくほと
に、ついに虎にゆきあひて、むなしうのちおはりぬとなん。この
ことは、親王の伝にもみへ侍らねは、しるしいれぬるなるへし。昔
のかしこき人々の、天竺にわたり給へる事をしるせるふみにも、大
唐新羅の人々はかすあまたみえ侍れと、この国の人は一とりもみえ
さんめるに、この親王のおもひたち給けん心のほと、いとくあは

れにかしこく侍り。昔は、やすみするまうけのすへらきにて、もゝ
 のつかさにあふかれきといへとも、いまは道のほとりのたひのたま
 しいとして、ひとりいつくにかおもむきたまひけんと返々にははれ
 に侍り。大唐の義朗律師の天竺にゆくとして身をほろしたる事をい
 ふ所に、師子州にもすてにみえす。中印度にもまたきこえす。おほ
 くはこれたましる異代にかへるらんと侍事おもひてられて、とに
 かくに心すそに侍。さても、しん王の身ははるかのさかひにうつ
 り給けれとも、みつきものは猶あとにそなへられけん事なきけふか
 くきこえ侍れ。

〔校異〕(1)わたりたまひける↓渡り給ひける(神)(2)道の↓みちの
 (譚・類・版)(3)ように↓用意に(神)(4)大かんしを三持給(神)
 ちたまひ↓大かんしお三もちたまひ(為)大かんしを三持給(神)
 (5)いきてこひければ↓出来て乞ければ(神)(6)これにて↓是にて
 て↓とり出て(神)(7)この↓此(神)(8)これにて↓是にて
 (神)(9)道おゆく↓道をゆく(宮)道を行(神)みちをゆく(譚
 ・版)みをゆく(類)「ち脱か」と傍記(10)うへを↓うへを
 (為)宮(11)あり有(神)(12)この人↓此人(神)行は↓
 給は(譚・神・類・版)(13)汝心ちいさし。心ちいさき人の↓汝心
 ちいさき人の(宮)汝心ちいさし。心ちいさき人の(神・類
 ・版)(15)ほとこす↓施す(神)(16)をば↓おは(為)(17)う
 く↓受(神)(18)うせに↓失に(神)(19)あやしくて↓あやしく
 (宮)(20)わかこころを↓わかしろを(神)我心を(神)(21)はか
 りたまひ↓はかり給ひ(譚)はからひ(神・類・版)(22)そこそ↓社
 (神)そ(類)(23)くやくしく↓悔しく(神)(24)さて↓扱(神)
 (25)やうく↓漸(神)やうやう(類)(26)ついに↓つるに
 (譚・神・類・版)(27)ゆきあひて↓行あひて(神)(28)いのち
 おはりぬ↓命をはりぬ(神)(29)この↓此(神)(30)みへ↓見え
 (譚・神・版)見へ(類)(31)いれ↓入(神)(32)わたり給へ
 ↓渡り玉へる(譚)渡り給へる(神)(33)ふみ↓文(神)(34)か
 す↓数(神)(35)みえ↓みへ(類)侍れと↓侍れは(神)(37)
 この↓此(神)(38)ひとりも↓独りも(神)(39)みえ↓みえ(為)
 ・宮(40)この↓此(神)(41)おもひたち↓思ひ立(神)(42)あへ
 れに↓哀に(神)(43)おもひもの(譚)百の(神)(44)いへ
 とも↓いへ共(神)(45)ほとり↓辺り(神)(46)たひの↓欠文
 (神)(47)たましい↓たましい(譚・神・類・版)(48)いつくに
 か↓いつくに(類)(49)おもむき↓おもむき(譚)底本の「む」
 は「ひ」にも似るが「む」と判読(50)たまひけん↓給ひけん(神)

底本は「てん」ともよめる(51)返々に↓返々(為)宮返々も
 (神・類・版)(52)ゆく↓行(神)(53)身を↓身お(為)(54)事
 をいふ所に↓事ヲ云所に(神)(55)みえ↓みへ(為)宮・類
 (56)きこえす↓聞えす(神)(57)これ↓是(神)(58)たましい
 ↓玉しる(譚)異代↓累代(類)(60)かへるらんと侍事↓か
 へ侍る事(神・類・版)(61)おもひてられて↓思出てられて
 (神)思てられて(類・版)(62)心すそに侍↓心すろに侍り
 (神)こころすろに侍り(類・版)(63)さても↓さて。(為)扱も
 (神)(64)しん王↓親王(宮・神)(65)けれとも↓けれ共(神)
 (66)事↓事(為)事こそ(宮)こそ(譚・神・無・類)(67)ふかくき
 こえ↓深く聞え(神)

さても、(1)発心集には伝記の中にある人々あまたみえ侍れと、こ
 のふみには伝にのれる人をはいることなし。かつは、かたは
 かりも侍り。またよの中の人ならひは、わづかにおのれかせは
 くあさくものをみたるまゝに、これはそれかしかるるものの中
 にありし事をかしなと、よにもたやすけにいふ人もあるへし。ま
 た、もとよりふてをとりてものをしるせるものゝ心さしは、我この
 事をしるしとめすは、後のよの人いかてかこれをしるへきと思よ
 りはしまれるわきなるへし。されはこそ、章安大師は、この事もし
 おちなは将来もかなしむへしとはかきたまふらめ。いはんや、また
 ふるき人の心もたくみに詞もとゝのほりてしるせらんおやいまあや
 しけにひきなしたらんもいかゝとおほえ侍。またこのかきしるせる
 おくとも、いさゝか天竺晨旦日域のむかしのとをひとふてなと
 ひきあはせたる事の侍は、これおはしにてしりそむるえともやなり
 侍らんとおもひたまひて、つかうまつれる也。長明は、人の耳を
 もよるこはしめ、またけちえんにもせむとてこそ、僧のうちの人の
 ものせけんお、よの人のさやうにはおもはて、侍にならひてかやう
 にもおもひ侍るなるへし。ゆめくさかくれなきかけにも、我を
 そはむる詞かなとおもふましき也。

〔校異〕(1)さても↓扱(神)(2)ある↓有(神)(3)みえ↓みえ(為)
 ・宮 見え(譚・神・類・版)(4)侍れと↓侍れと(為)(5)

二、如幻僧都の発心のこと

昔、如幻僧都といふ人をはしけり。もとはならの京東大寺にすみ
て、華嚴宗をそならひ給ひける。そのころ、善珠大徳学問のこうた
かくて、ねふりおのそきうゑおしのひて見えければ、時の人もいみし
きこといひあへりけり。僧都これをみて、我いかにかくもんとす
もこの人にまさるへからず。しかし、この道おあらためて、ひとす
ちにおこなひの道におもむきて、この人よりはさきたちて世のきこ
えをもとり、位をもあからんとおもひて、くまのにこもりて身をく

この↓此(神)(6)人を↓人お(為)(7)こと↓事(譚・神)
(8)かた↓かたかた(類)⑨よの中↓世の間(神)(10)なら
ひ↓習ひ(神)(11)おのれ↓をのれ(譚・神・類・版)(12)もの
を↓ものお(為)(13)みたる↓見たる(譚・神・類・版)(14)こ
れは↓是は(神)(15)しるせる↓せる(神・類・版)(16)あり↓
有(神)⑩たやすけに↓たはやすけに(譚・版)(18)いふ↓云(神)
(19)また↓又(神)(20)ふてを↓筆を(神)(21)ものを↓ものお
(為)物(神)(22)この事↓このこと(譚・類・版)此こと
(神)(23)こそ↓社(神)(24)この事↓此事(神)(25)もしお
ちなは↓若落なは(神)(26)かなしむ↓な(宮)かなしむ
(譚)(27)かきたまふ↓書給ふ(神)(28)また↓又(神)(29)心も
↓ころも(類・版)(30)と↓のほりて↓と↓のをりて(譚)⑪
しるせらんおや↓しるせらんおや(為)しるせらんを(宮)しる
せんを(譚・神・類・版)(32)ひき↓引(神)(33)らん↓らむ
(為・宮)(34)いか↓と↓いか(神)(35)侍↓侍る(神)(36)ま
たこのかきしるせる↓又此書しるせる(神)(37)あと↓跡(神)
(38)ひきあはせ↓引合(神)(39)事↓こと(譚・類・版)是を(神)
は↓侍るは(神)(41)これお↓これを(宮・類・版)是を(神)
(42)しり↓知(神)(43)なり↓成(神)(44)侍は、これおはしに
てしりそむるえともやなり↓欠文(譚)(45)おもひたまひて↓思
ひ玉ひて(譚)思ひ給ひて(神・類・版)⑫耳をも↓耳おも(為)
・宮)耳を(神)(47)またけちえんにも↓又結縁にも(神)(48)
せむ↓せん(神・類・版)(49)こそ↓社(神)⑬僧のうちの↓伝
のうちの(為・宮・類・版)(52)けんお↓けんを(譚・神・類・版)
(53)よの人の↓よの人(宮)世の人の(神)(54)さやう↓左様
(神)(55)おもはて↓欠文(神)(56)侍に↓侍るに(神)(57)
おもひ↓思ひ(宮)(58)侍る↓侍(為・宮)(59)くさ↓草(神)
(60)かけにも↓かけも(神)(61)也↓なり(為・宮)

たきほねをりてひとすちにおこなひたまひけり。かゝるほとに、
かたはらに、わかをこなひを五六かきねたらんほとにおこなふもの
ありけり。これをみてあさましと思ひて、さてもかくして世中にあ
りてはつるにはいかなるへきそと思ひつゝくるに、いとあちきなく
よしなくて、やかてはしりいてたまひにけり。

〔校異〕(1)昔↓むかし(譚・神)(2)いふ↓云(神)(3)をはし↓お
はし(譚・神・類・版)⑭ならの↓南都の(神)(5)すみ↓住
て(神)(6)を↓おそ(為)(7)ならひ↓習ひ(神)(8)給ひ
たまひ(為・宮・譚・類・版)給(神)(9)その↓其(宮・
神)⑮ころ↓ころは(譚・類・版)比は(神)(11)こうたかく
て↓功高くて(神)(12)ねふりお↓ねふりを(宮・譚・神・類・
版)(13)のそき↓除き(神)⑯うゑお↓うゑを(宮)こゑを(譚・
神・類・版)(15)見えければ↓みえければ(神・類・版)(
16)ことに↓事に(譚・神)(17)かくもん↓字間(神)(18)この
人↓此人(神)(19)この道お↓この道を(宮・譚・類・版)此道
を(神)(20)ひとすちに↓一筋に(神)(21)おもむきて↓をもむ
きて(譚)(22)この人↓此人(神)(23)さきたちて↓先たちて
も(譚・神)(24)きこえをも↓きこえおも(為)きこえをも(宮)聞えを
も(譚・神)(25)位をも↓位おも(為)(26)あからんと↓あから
むと(為・宮・神)(27)おもひて↓思ひて(譚・神・類・版)(
28)くまのにこもりて↓熊野に籠りて(神)(29)ほねをりて↓
ほねをおりて(譚・類・版)骨を折て(神)(30)ひとすちに↓
すしに(神)(31)たまひ↓玉ひ(譚)給ひ(神)(32)をこな
ひ↓おこない(為・宮)おこなひ(譚・類・版)(33)んほとに↓
らん↓らむ(譚)(34)かたはらにわかをこなひを五六かきねたら
ん↓欠文(神)(35)あり↓有(神)(36)これをみて↓これおみて(為)
(是を見て(神)(37)あさましと↓浅間敷と(神)(38)思ひて
↓おもひて(為・宮・神)(39)さても↓扱も(神)(40)世中に
ありては↓世の中有ては(神)(41)つるには↓ついに(為・宮)
(終には(神)(42)へきそと思ひ↓へきことおもひ(譚)へき
事と思ひ(神)へきこと↓おもひ(類・版)(43)はしりいてたま
ひ↓走り出給に(神)

さて、はりまの国たかをたにといふ所におはして、他事なく後世
のおこないして、つねには心をすまして、華嚴経をそよみたまひけ
る。かゝるほとに、弟子にならむとて、人あまたいてきあつまり
て、後にははいなきほとに侍ければ、はなれたる所にあやしいほ

りかまて、たゞひとりとして、くひものなともみつからいとなみ
て、弟子おはとき／＼そこさせける。あるとき、いま七日はかりは
きひしきおこなひをする事侍へし。ゆめ／＼きたることなかれとあ
りければ、そのほと人ゆきかふ事なかりけり。日ころ過て、いほり
のほとにいひしらぬにほひの侍ければ、あやしくてみければ、てを
あはせて西にむかひていのちつきたまひにけるなるへし。そのとし
は六十二。ころは十二月二日にてそ侍ける。くわんおんを本尊にし
たまひけるとかや。この人の事、往生伝に侍めれと、このことは侍
らさめれば、しるし侍なるへし。かの伝には、唯識目明の道をあき
らかにならへると侍にや。また、僧都になれるよしも見えず。もし
僧都といへるは、ひか事にや侍らん。かのはりまのたかをたにゝあ
にかける御すかたのをはするは、きのしたに、いしをしきものに
て、ひかさと経ふくるとはかりを、きたまひたるすかたとそきき侍
し。発心のはしめより命終まですみておほへ侍り。

〔校異〕(1)さて↓扱(神)(2)たかをたにといふ所にたかを谷と云所
に(神)(3)おこない↓おこなひ(譚・神・類・版)(4)つね
常(神)(5)心を↓ころを(譚・類・版)(6)すまして↓澄し
て(神)(7)華嚴経をそよみたまひ↓花嚴経を説給(神)(8)な
らむ↓ならん(譚・神・類・版)(9)いてき↓出来(神)(10)ほ
い↓ほひ(類)(11)侍ければ↓侍りければ(神)「り」は小さく
傍記(12)いほり↓庵(神)(13)かまゑて↓かまへて(宮・譚・
類・版)構て(神)(14)たゝた(類)(15)ひとりとして↓ひ
とりゐて(為・宮・譚・類・版)独りゐて(神)(16)くひもの↓
食もの(神)(17)弟子おは↓弟子をは(宮・譚・神・類・版)
(18)あるときある時(神・類・版)(19)はかりは↓斗は(神)
(20)事↓こと(神・類・版)(21)きたること来たる事(神)き
たる事(為・宮・譚・類・版)(22)なかれ↓ななかれ(譚)(23)あ
り↓有(神)(24)そのほと人ゆきかふ↓その人ゆきかふ(譚)其
程人往かふ(神)(25)日ころ↓日比(神)(26)過ていほりの↓す
きていほりの(為・宮・類・版)過て庵の(神)(27)てを↓てす
(為)手を(神)(28)あはせて↓合て(神)(29)むかひて↓むか
ひてて(類)(30)いのちつきたまひに↓命終給に(神)いのちつ
き玉ひに(譚)(31)その↓其(宮)(32)ころは↓ころは「の
は」傍書(為)(33)にてそゝにて(譚・神・類・版)(34)くわ

んおん↓くわんをん(譚)観音(神)くはんおん(類)「宮」
と「給」(版)「は」は「は」ともよめる(神)したまひにし玉ひ(譚)
とし給(神)(36)この人↓此人(神)(37)侍めれと侍るめれと
(神)(38)かの↓彼(神)(39)目明↓「為」は目、底本及び「宮」
「版」は目とも因ともよめる。「類」は因明。④道を↓道お(為)
道に(宮)(41)あきらかにならへると侍↓明力に習へると侍ル
(神)(42)また僧都に↓僧都に(譚・神・類・版)(43)見えず↓
みえず(神)(44)ひか事↓ひかこと(類・版)(45)侍らん↓侍ら
む(為・宮)(46)かのはりまの↓彼播磨の(神)(47)ゑに↓絵に
(神)(48)御すかた↓御姿(神)(49)をはする↓おはする(神・
類・版)(50)きのしたに、いしを↓木の下に、石を(神)(51)ひ
かさ↓日かさ(神)(52)はかりを、きたまひたる↓斗置給たる(神)
(53)きき侍し↓き侍し(宮・譚・版)聞侍し(神)(54)おほへ
↓おほえ(宮・類・版)覚え(譚・神)

三、玄寶僧都門おさして善珠僧正をいれぬ事

昔、ならの京興福寺の僧にて、玄寶僧都といふ人おはしけり。智
行ともにそなはりて、御門僧都の位おさづけ給ければ、哥をよみて
はひかくれにける。

とつくにはやまみつきよしことしけき

君の御代にはすまぬまされり

となん侍ける。ことにあはれにこそ侍れ。とつくにとは、とおつ国
といへるにこそ。まことにさかひへたゝれる国の人もかよはて、い
たつらにきよき山水なかれたる所おほく侍らんものと、ことに身
にしみて侍り。さて、その心さしをとけたまひける後の事なめり。
御門のおほせにて、弘法大師のせうそくし給へることはにも、山ふ
かくいみしくおもひすましておはするよしとふらひたまひためる
は。御返事いか侍けん、いふせく思ひやられ侍。この僧都は、そ
のかみよりなをのかるゝ心のふかくおはしけるなめり。善珠大徳の
僧正になりて、悦申て返給けるに、あめふりければみのかさおきて
なん返たまひける。よもふけ風も身にしみわたりければ、もとのゐ
所にはやも返てしかなと思ひて、からうしてゆきつきて西面の僧房
のとくちにたちてたゞき給に、あえておとするいらへもなし。やゝ

ひさしくたゝかれて、この玄寶のきみいとひきやかに、たそといらへられけり。あなあさまし、たゝかはあけ給へとさはかり契きこゑつるかひもなく、いといたうあめにふられてわつらはしきに、いかてかおそくおとつれたまふ。まどろみ給つるかとなりければ、いたくよきふるまひこのむ人は、またわひしきめにもあへは。思もしりたまへかしとおそくあくるそかしとそいらへこちたまひける。

〔校異〕

(1)昔↓むかし(譚)(2)いふ↓云(神)(3)おはし↓をはし(為・宮)(4)智行ともに↓知行ともに(譚・類・版)知行共に(神)(5)位お↓位を(宮・譚・神・類・版)(6)かくれにける↓にける(譚)(7)とつくには↓外つ国は(神)(8)やまみつきよし水草清み(神)(9)ことしけき↓事しけき(神)(10)君の御代には↓君か御代には(譚・類・版)都のうちは(神)(11)ことにはあはれこそ↓殊に哀に社(神)(12)とつくに↓とつ国(神)(13)とおつ国↓とをつ国(宮・譚・神・版)とほつ国(類)(14)こそ↓社(神)(15)さかひ↓さか(類)(16)へたゝれる↓へたられる(宮)へてたゝれる(類)(17)かよはて↓かよはぬ(神)かすはて(類)(18)きよき↓清き(神)(19)なかれたる↓かを(傍記)(20)さて、その↓扱其(神)(21)たまひける↓玉ひける(譚)給ける(神)(22)にて↓まで(譚)(23)給へる↓玉へる(譚)(24)ふかく↓深く(神)(25)たまひ↓給(神)(26)この↓此神(27)その↓其(宮)(28)なを↓猶神(29)なりて↓成て(神)(30)悦↓悦ひ(神)(31)返給けるに↓かへり給けるに(神・類・版)(32)あめ↓雨(神)(33)かさお↓かさを(譚・類・版)かさ(神)(34)返たまひ↓かへり給ひ(神)帰たまひ(類・版)(35)よも↓夜も(為・宮・譚・神・類・版)(36)わたり↓渡り(神)(37)返て↓歸りて(神・類・版)(38)からうして↓からふして(神)(39)ゆきつきて↓往つて(神)(40)西面の↓面おもて(神)(41)とくちに↓戸くに(神)(42)たちてたゝき給に↓たてき給に(為)立てたゝき給に(神)(43)あえて↓あらて(譚)あへて(神・類・版)(44)おとす↓をとする(譚・類・版)音する(神)(45)この↓此(譚・神・類・版)(46)きみ↓君(神)(47)あさまし↓浅まし(神)(48)あけ給へ↓あけたまへ(為・宮)あけ給(神)(49)契きこゑ↓むへきこゑ(譚)むへきこゑ(神・類・版)(50)いたう↓いとう(神)(51)あめに↓雨に(神)(52)おそく↓をそく(譚)(53)おとつれたまふ↓をとつれたまふ(譚・類・版)をとつれ給ふ(神)(54)給つるか↓給へるか(譚・神・類)(55)ありければ↓有ければ(神)(56)ふるまひこのむ↓振舞好ム(神)(57)またわひしき↓又忙しき(神)きたれひしき(類)(58)思も

しりたまへかし↓思ひもしりたまへかし(宮)思ひも知給へかし(神)(59)おそく↓をそく(譚)こちたまひける↓たちたまひける(宮)うち玉ひける(譚)うちし給ひける(神)うちたまひける(類・版)

(1)この善珠僧正も、いみしきおこなひ人也。靈異記といふふみに(2)は、しにて國王となりたりとそ侍れと、まことにはとそつの内院に(3)むまれたまへる人也。僧房のかへにつはきかけたりとて内院よりかへされて、さまゝのもちものかへしるなへて、いみしき名香とも(4)かひてゆにわかつて、僧房のかへをあらひたまひて内院の往生とけたる人也。そのかへは、ちかころまてかうはしく侍けりとそ。さて(5)も、この僧都の事発心集にもみえ侍めれと、この事は侍さめれば、(6)よきつゐてに因縁もほしく侍てかき侍ぬるなるへし。すへて、この(7)国によをのかるゝ人の中に、この人はことにうらやましくそ侍。止(8)観のなかには、徳をつゝめきすをあらはし狂をあげ実をかくせといひ、またもしあとをのかれんに、のかるゝ事あたはすはまさに一挙(9)万里にして絶域他方にすへしといへり。いま、このあとをたつぬる(10)かのおしへにつふとかなひて侍にや。あはれにかしくこそ侍(11)もろこしの釈惠観の、とくをかくしわひて八千里をへたてたる(12)国にゆきて、あやしのものゝもとに僧のかたちをとみえすなり(13)て、ひつしをかひて世をわたりておはしけるは、見るめもさらに(14)きくらされて侍そかし。いま、この玄寶の君のあとをみるに、ある(15)ときはつふねとなりて人にしたかひてむまを(16)ふねにみなれさはさして月日をゝくるはかりことにせられけん事、(17)ことにしのひかたも侍かな。あきはてぬれはとなけき、またはけ(18)かさしとちかひ給けん心のうち、猶々やるかたなくそ侍へき。

〔校異〕

(1)この↓此(神)(2)といふ↓と云(神)(3)ふみには↓文には(神)(4)しにて↓死て(神)(5)なりたり↓成たり(神)(6)まことには↓真には(譚)(7)むまれたまへる↓むまれ玉へる(譚)生れ給へる(神)(8)つはきかけたり↓つはきはきかけたり(為・宮)御はきかけたり(類)(9)かへしるなへて↓かへしそ

なへて(類)底本は「そ」とも「ろ」ともよめる。(10)いみしき↓
欠文(神)(11)ゆに湯に(神)(12)かへを↓かへ(為)壁を
(神)(13)あらひたまひてあらひ玉ひて(譚)あらひ給ひて
(神・類・版)(14)とけたる↓遂たる(神)(15)そのかは↓其壁
は(神)(16)ちかころまで↓近きまで(神)(17)侍り↓侍りけり
(神)(18)さても↓扱も(神)(19)みえ侍めれと↓見え侍めれと
(為・宮)みえ侍めれ(譚)見え侍れと(神)(20)この事は↓
このことは(譚・類・版)此事は(神)(21)侍さめれは↓侍らさ
めれは(神)(22)つゝてに↓次に(神)(23)つゝてに(類・版)
(23)かき↓書(類)(24)よを↓世を(神)(25)中に↓なかに(神)
(26)この人は↓此人は(譚・類・版)(27)侍り侍る(神)(28)な
かには↓中には(神)(29)狂をあげ↓きをあげ(譚)(30)実を↓
実を(為)(31)いひ↓云(神)(32)またもしとをのかれんにの
かる↓事↓又若跡をのかれむに遁る事(神)(33)一挙万里にして
↓一挙万里にして(神)(34)いへり↓云り(神)(35)このあとを
たつめるに↓此跡を尋ぬるに(神)いまこの跡をたつめるに(譚)
(36)かのおしへに↓かのをしへに(譚・類・版)彼おしへに(神)
(37)こそ侍れ↓杜侍れ(神)(38)もうこしの↓唐土の(神)(39)と
くをかくしわひて↓徳を隠れて(神)(40)八千里をへたてたる国
↓八千里おへたてたる国(為)八十里を偏たる国(神)八千をへ
たてたる国(類)(41)ゆきて↓行て(神)(42)もとに↓共に(神)
(43)かたちをと↓かたちとも(為・宮・譚・神・類・版)(44)
みえずなりて↓見えずなりて(宮・神)みえず成て(譚)45ひつ
しをかひて世をわたりておはしけるは↓欠文(神)(46)見るめも
↓みるめも(為・宮・譚・類・版)(47)さらに↓更に(神)(48)
いまこの↓今此(譚・神・類・版)(49)あとを↓跡を(神)(50)
あるときは↓ある時は(譚)有時は(神)(51)つふね↓御ふね
(譚)(52)なりて↓成て(神)(53)人にしたかひてむまをかひ↓人
に随て馬をかひ(神)(54)或ときはわたりしふねに↓或時は渡しふ
ねに(神)或ときはわたりしふね(譚)(55)さし↓掉(神)(56)月
日をくる↓月日を送りける(神)月日をくる(類・版)(57)
はかりことに↓はかりこと(神)(58)ことに↓殊に(神)(59)な
けき、または↓歎き、又は(神)(60)うち↓中(神)

あはれ、ほとけのかゝる心をあたへたまひてたゝいまもはしりい
て、あとかたなくひとりかなしみひとりなきて、袖をさへな
みたをなかしあらはやとなけゝともかひなくて、としもかさなり
ぬるそかし。けに人もしらぬさかひにあらんは、いみしくすみわた
りてそ待ぬへき。むけにちかき所なれとも、そのかみまの↓入江を
み侍しに、ひらやまおろしふきすすみてむかしおほしきおはなかず

ゑに(18)そうつらいとあはれにきこえしか、つねに心にとまりて、人
もとかめぬ山のふもとにうつらをととして、あやしの草のいほの
身ひとつかくすへきむすひてみ侍はや。さてまたすみにくは、い
つくにもゆきかくるゝそかしなとつねにおはえ侍也。しかあるに、
いまたこゝをはなるへきときのいたらぬにこそ侍めれ。さなるへき
事のありとしもなき身の、昨日もくれけふもすぎぬる事、猶々心の
ほかに侍。さてまたつくゝと思には、このあやしの山の中に身を
かくしても、八とせの秋をくくりきぬ。天竺晨旦のふみをも、こゝ
にておほくひらけり。さるへき契にて、この山水おのみ、この山の
したおりくふへきえにこそはあるらめと、おもひのとむるときもあ
り。かゝるまゝには、たゝかやうの人のあとをおもひいて、した
ひかなしみて心をやすめ侍れば、せめてのむつまじさにしるしいれ
ぬるなるへし。

〔校異〕

(1)あはれほとけの↓あはれ仏の(為・宮)哀仏の(神)(2)心
を↓心を(為)(3)たまひて↓給ひて(神)(4)たゝいまもはし
りて、あとかたなくひとりかなしみひとりなきて、袖をさへな
みたをなかしあらはやとなけゝともかひなくて、としもかさなり
ぬるそかし。けに人もしらぬさかひにあらんは、いみしくすみわた
りてそ待ぬへき。むけにちかき所なれとも、そのかみまの↓入江を
み侍しに、ひらやまおろしふきすすみてむかしおほしきおはなかず
んなと常に(神)「かくるゝ」の「る」脱(類)(28)はなる↓は
はなかなすゑに(宮)おはなかな末に(譚)尾花か末に(神)(19)き
こえしかゝきこえしか(為・宮)聞えしか(神)(20)つねに↓常
に(神)(21)心に↓心に(宮)(22)ふもとに↓麓に(神)
(23)うつらをとと↓うつらをとと(為)うつらをとと(神)
(24)いほの↓庵の(神)(25)さて↓扱(神)(26)すみ↓住(神)(27)
いづくにもゆきかくるゝそかしなとつねに↓何国にも往かくな
んなと常に(神)「かくるゝ」の「る」脱(類)(28)はなる↓は

(44)たまひてし給てし(神)(45)世中に↓世間に(神)(46)いひ云(神)(47)すみか↓住家(神)(48)もの↓物に(神)(49)この↓此(神)(50)思ひし↓おもひし(神)(51)心も↓心(神)(52)なむ↓なん(神・類・版)(53)侍也↓侍るなり(神)(54)を↓を(神)(55)はく↓み↓はく↓くみ(神)(56)きこゑん↓きこゑん(譚・神・類・版)(57)めくらし↓めくらし(譚)(58)うちん↓中の(神)(59)もの↓物(譚・神・類・版)(60)た↓を↓し給り↓おしはかり(神)た↓おしはかり(類・版)(61)給へし↓給ふへし(神)(62)このい↓市(宮)此市(神)(63)なかは↓中は(神)(64)かやうにて↓かやうに(神)(65)あやしもの↓あやしもの(譚)あやしのもの(神・類・版)(66)いたして↓出シて(神)(67)くいのもの↓くいのもの(譚・神・類・版)(68)をのつから↓おのつから(為・宮)(69)いてきて↓出来て(神)(70)さらに↓更に(神)(71)事↓こと(譚・類・版)(72)すちへに↓頭に(神)(75)雪お↓雪を(宮・譚・神・類・版)(74)かうへに↓頭に(神)(75)雪お↓雪を(宮・譚・神・類・版)(76)めのまへに↓目の前に(神)(77)いつはりを↓いつはりお(為)(78)かまへて↓かまへて(為)(79)のちのよ↓のちの世(宮)後の世(神)(80)わすれ↓忘れ(譚)(81)かなしみ↓かなしみ(譚)(82)なみた↓涙(神)(83)かきつく↓かきつく(神)(84)観念↓観念の(神)(85)しつか也↓しつかかななり(神・譚・類・版)(86)所也↓所なり(神)(87)弟子も↓弟子(神)(88)なみた↓なみたに(為・宮・譚・類・版)涙に(神)(89)きく↓聞(神)(90)さくりも↓さくりもあへず(神・類・版)(91)よ↓とよよと(為)よこと(譚)

そのあと、かや、きたこうちいのくまに右のいとほの侍めるは。いにしへは、そこになむいちのたちけるに侍。或はそのそとは、玄法師のために空也上人のたて給へりけるとも申侍にや。まことにあまたの人をはく、まんとたしなみたまひけん、きこそそとおもひやられ侍。あはれ、この世中の人々の、いとなくとも事もかくましきものゆへに、あまたるまいりたるをいみしき事に思ひて、これかためにさまの心をみたること、はかなくも侍かな。命のかすみはて、ひとり中有のたひにおもむかんときたれかししたかひとふらふものあらん。すみやかにこの空也上人のかしこきはからひにしたかひて、身はにしきの帳の中にありとも、心には市のなかにましはるおもひをなすへきなめり。また、この空也上人の事、伝に

は延喜御門の御子ともいひ、また水のなかれよりいてき給へる化人也とも侍めり。そのふるまひ、ことにあはれにありかたく侍なり。

〔校異〕

(1)あと、かや、あととかや(宮)跡とかや(神)(2)きたこうち↓きた小路(神)(3)いのくまに↓「譚」に「いのくまに」とあり、「い」の右傍に「る敷」と傍書(4)石のそとは(底本には「右のいとは」を訂正してある。諸本とも「石のそとは」)(5)なむ↓なん(神・類・版)(6)いち↓市(宮・神)(7)その↓其(神)(8)そとは、玄法師↓そとはは玄法師(神)そとは、玄法師(類)(9)たて給へり↓たて玉へり(譚)立給へり(神)(10)申侍にや↓申にや(給)(11)たしなみたまひけん↓たしなみたまひけん(為)たしなみ玉ひけん(譚)たしなみ給ひけん(神・類・版)(12)さこそ↓さ杜(神)(13)おもひ↓思ひ(譚・神・類・版)(14)世中↓世間(神)(15)いとなくともいとなみ共(神)(16)事↓こと(譚・神・類・版)(17)もの↓物(譚・神・類・版)(18)ゆへに↓ゆへに(為・宮)(19)るまいり↓るまはり(神)給まはり(類)(20)たるを↓たる(類)(21)思ひて↓おもひて(為・宮)(22)ために↓ために(神)(23)さま↓のさままさの(類)(24)心を↓心お(為)(25)こと↓事(神)(26)侍かな↓侍るかな(神・類・版)(27)命↓いのち(類・版)(28)かす↓数(神)(29)ひとり↓ひとり(宮)独り(神)(30)た↓旅(神)(31)おもむかんとき↓おもむかんと(譚)おもむかんと時(神)(32)たれか↓誰か(神)(33)したかひて↓随て(譚)(34)ありとも↓有とも(神)(35)なかに↓中に(為・宮・神)(36)おもひ↓思ひ(譚・神・類・版)(37)また↓又(神)(38)この↓此(神)(39)延喜御門↓延喜の御門(神)(40)ともいひ↓共云(神)(41)また↓又(神)(42)いてき↓出来(神)(43)化人也↓化人なり(神)(44)侍めり↓侍るめり(神)(45)ありかた↓有難(神)(46)侍なり↓侍めり(類)

五、清海上人の発心の事

むかし、ならの京、超證寺に清海といふ人おはしけり。もとは興福寺の僧にて、かくもんおそむねとたしなみける。かゝるに、この国のならひいまもむかしもうたてさは、東大寺興福寺ふたてらの僧とも中あしき事ありて、東大寺へいくさをと、のへてよせけり。この清海のみきも、ゆみやなくひ身にそえてゆきけり。さるほとに、道にて時をつくりていくさおめきしけるに、身のけたちて、こはなにしてつる身のありさま。恩愛のいゑをいて、仏のみちに

る身は、人のくるしみおたすけ、ほとけのみのりのすたれんをかな
 しみなけくへきに、いまかたは僧のかたちにて、たちまちに堂塔
 僧房をやき、仏像経巻そこなひ、僧を殺さむとてゆく事こはなにの
 わさならんかなしくあちなし。いまみつけれられて、いかになる
 ととも、いかせん。しかし、はやくこよりゆきわかれなん、と
 思て、やおらはひかくれにけり。さて真如親王のあと超證寺といふ
 所にもりて、ひそかに法花の四種三昧をそおこなひける。観念
 こうつもりて、香の煙の化仏のあらはれ給けるを、すゑの代の人に
 えんむすはせんとて、ひとつとりとめたまひたりけり。三寸はか
 りの仏にてそおはしましける。すへてこの人、観念成就してゐたま
 ひたりける。めぐり一里を浄土になし給けるなり。

〔校異〕(1)いふ(神)(2)かくもん(神)(3)おそ(神)をそ
 (宮・譚・神・類・版)(4)むね(神)(5)か(神)に(神)か
 (譚)か(神)に(類)(6)この(神)(7)ふた(神)ら(神)ふた
 寺(神)(8)僧とも(神)(9)この(神)(10)ゆみ(神)
 弓(神)(11)やなくひ(神)やなく(譚)(12)身にそえて(神)身にそ
 へて(譚・神・類・版)(13)ゆきけり(神)(14)なに(神)に
 何(神)(15)しつる(神)底本はしつる」とある。諸本「しつる」
 (16)ありさま(神)(17)い(神)を(神)い(神)を(神)家(神)
 (18)いて(神)いて(神)出(神)(19)仏の(神)仏の(神)道(神)
 (20)くる(神)くる(神)し(神)を(神)譚・神・類・版(神)苦し(神)御法
 (21)ほとけ(神)(22)みのりの(神)みのりの(神)類・版(神)御法
 (23)すたれん(神)すたれん(神)を(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (24)かなしく(神)(25)な(神)な(神)な(神)な(神)な(神)な(神)な(神)
 (26)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (27)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (28)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (29)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (30)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (31)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (32)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (33)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (34)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (35)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (36)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (37)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (38)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (39)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (40)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (41)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (42)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (43)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (44)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (45)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (46)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (47)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (48)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)
 (49)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)か(神)

たまひたり(神)玉ひたり(譚)み給ひ(神)(50)一里を(神)一里を
 (為)(51)浄土に(神)浄土に(譚)(52)給けるなり(神)給けるなり(神)
 給ひけるなり(神)

そも(1)四種三昧といへるは、一には常座三昧。いはく九十日を
 かきりて結跏正坐して、思を法界にかけて、一切の法は仏法也と信
 して、寂滅法界に安住すれば、こゝにゐるから諸仏をみたまつ
 り、仏の説法をきく也。二には常行三昧。いはく九十日をかきりて
 身につねに行道し、くちにつねにあまた仏の名をとへ心につねに
 あまた仏を念して、やすみやむことなし。神をはこはすして、諸仏
 をみたまつり、仏の説法をきく也。三には半行半座三昧。いは
 く、日夜六時に六根のつみを懺悔して、百千万億阿僧祇劫のつみを
 滅して、五欲をはなれすして六根をきよめ、釈迦多宝文殊薬王等の
 もろく大井をみたまつる。四には、非行非坐三昧。いはく随自
 意これ也。諸経にとくところのおこなひの、かみの三にあたさるは
 みな随自意三昧なるべし。大千塵数の仏の国にたからをみて、ま
 つしき人に布施せんよりは、この三昧をきくとおとろかさらんには
 かし。もしすいきせんものは、三世の諸仏并、すいきし給と待め
 れは、たのもしくたうとくそ侍。恵心ノ要法文四種三昧の中ノ常行
 三昧には、はれたる星をみるかこく化仏をみたまつるなど止観
 にはときて待めれば、さやうに侍けるにこそたうとく思ひやられ
 侍。陳ノ太建十七年天台大師をはりおとりたまひしに、智朗禪師ノ
 しにたまひなむのちは、誰をかたうとみあふくへきとひたてまつ
 りしには、四種三昧これ汝か明道す也とそこたへ給ひける。この
 やまとの国のほりまの書写のひしりも人のきて功德をとふときは、
 四種三昧をこたへ給けり。まことにいみじき功德にて、こそ。この
 清海ノ君ノ事拾遺往生伝にのせられて待めれと、この事は見えさめ
 れはしるしのせ侍ぬる。

〔校異〕

(1)そもく抑(宮・神)(2)一には第一に(神)(3)常座三昧↓常坐三昧(為・宮・神・類・版)(4)結跏正坐↓結跏正座(譚)(5)思を思ひを(神)(6)仏法也↓仏法也(譚・神・類・版)(7)こくに愛に(譚・神)(8)ゐなから居ながら(譚)(9)みたてまつり見たてまつり(神)(10)説法↓諸法(類・版)(11)仏の説法をきく也↓欠文(神)(12)第二(神)(13)九十日をかきりて↓九十日おかりて(為)九十日を限りて(神)(14)身につねに↓身には常に(神)(15)くちをつねに↓口に常に(神)(16)あみた仏↓阿弥陀仏(神)(17)名をとてなへ↓名唱へ(神)(18)つねに↓常に(神)(19)念してねんして(譚・類・版)(20)やすみやむこと↓休み止事(神)(21)み見(神)(22)きく也↓聞なり(譚)聞也(神)(23)三には第三には(神)(24)半行半坐↓半行半坐(為・宮・類・版)(25)つみ↓罪(神)(26)阿僧祇劫↓阿僧祇劫(譚)(27)つみ↓罪(神)(28)はなれ離れ(神)(29)きよめ↓清め(神)(30)釈迦↓尺迦(譚)(31)薬王等↓薬師等(譚)薬王(類)(32)もろく↓もろもろの(為・神・類・版)(33)大井をみ↓大井を見(神)大菩薩をみ(類)(34)四↓第四(神)(35)非行非坐↓非行非座(譚)(36)いはく謂く(神)(37)これこれなり(譚)是也(神)(38)とくところ↓説給ふ所(神)(39)かみの上の(神)(40)みな↓皆(神)(41)たからを↓宝を(譚・神)(42)きくもて聞て(譚)きて(類)(43)すいき↓随喜(神)(44)せんせむ(類・版)(45)三世の↓三世ノ(為)(46)諸仏并諸仏菩薩(類)(47)すいき↓随喜(神)(48)恵心ノ要法文ノ心をす↓恵心要法文ノ心をす(譚)恵心要法文ノ心ヲノ(神)恵心要法文の心をす(類・版)(49)中ノ中の(宮・譚・神・類・版)(50)はれたる空の(神)(51)なと↓なりと(神)(52)ときて説て(神)(53)侍ける↓侍る(神)(54)陳ノ陳の(神・類・版)(55)年↓季(神)(56)をばりお↓おはりを(宮)終りを(神)をばりを(譚・類・版)(57)たまひしに↓玉ひしに(譚)給しに(神)給ひしに(類・版)(58)智朗禪師ノ智朗禪師の(宮・譚・神・類・版)(59)しにたまひしに給ひ(譚・類・版)死に給ひ(神)(60)なむのちはんのちはん(譚・類・版)なん後は(神)(61)誰をかたれおか(為)たれをか(宮)(62)ひたてまつりしは↓問たりしは(神)とひたてまつりしに(類)とひたてまつりしには(版)(63)明道す也↓明導師也(神)明導師也(類・版)(64)こたへ↓答(神)(65)給ひける↓たまひける(為・宮)玉ひける(譚)(66)この↓此(神)(67)書写の↓書写ノ(為)(68)人のきて↓欠文(神)(69)とふ↓問(神)(70)は四種三昧を人へ給けり。まことにいみしき↓欠文(譚)(71)功德にて↓功德に(神・類・版)(72)清海ノ君ノ事↓清海の君の事(宮・譚・版)清海のきみの(神)清海の君の(類)(73)られて↓られ(神)(74)この↓此(神)(75)見え↓みえ(譚・神・版)(76)侍める↓侍

める(類)

六、あつまのひしりのてつから山おくりする事

昔、あつまの方に、いみしく思ひすましたる聖ありけり。たゝひとりのみありて、すへてあたり人に人をよせず侍ける。たゝわかとそ、ときくいて、人にもみえける。また、身にもちたる物すこしもなし。仏も経もなし。まして、そのほかのものつゆちりもなし。かくるへき事やちかづきておほえけん、日ころしめをきたりける山にのほりて、ひうちけに哥をそかきて侍ける。

たのむ人なき身とおもへばいまはとて
てつからしつる山をくりかな
さて、はるかにほとへて、なすへき事ありて山にいれる人、これをみいたしたりけるとなん。ことに、あはれにしのひかく侍。なにももたらぬこそ、ことにあはれに、このもしく侍れ。かの天竺の比丘ノ坐禅ノゆかのほかに、なにとなくて、まらうとの井のおはしたるに、このはをかきあつめて、それにゐさせたまつりける事をみ侍しより、この事はいみしくこのもしく侍。いにしへ、のきちかきたちはなをあいせし人、くちなはとなりて木のもとにありなとも伝には見え侍。又釈迦仏、昔たゝ人にてをはしましけるに、毒蛇となりてさきにつちにうつめりしこかねをまつふとも侍めるは。

〔校異〕

(1)昔↓むかし(譚)(2)方に↓かたに(譚)(3)あり↓有(譚)(4)たゝひとりと唯ひとり(譚)唯ひとり(神)(5)ありて↓有て(神)(6)すへて↓欠文(神)(7)ときくいて↓時く出て(神)(8)みえ↓見え(為・宮)(9)また↓まゝ(類)(10)もち↓持(神)(11)まして↓増て(神)(12)ほかの↓外の(神)(13)もの↓物(譚・神)(14)なし↓侍らず(神)(15)かくる↓かくる(神・類)(16)日ころ↓日比(神)(17)をき↓置(神)(18)哥をそかきて侍ける↓哥をなん書て侍る(神)(19)山↓やま(譚・類・版)(20)かな↓哉(神)(21)さて↓扱(神)(22)事↓こと(譚・類・版)(23)ありて↓有て(神)(24)いれる↓入る(神)(25)これ↓是(神)(26)み↓見(神)(27)ことに↓殊に(神)(28)なに↓何(神)(29)もたらぬ↓持らぬ(神)(30)あはれに↓哀に(神)

(31) 文(譚)のひかたき侍。なにももたらぬこそ、ことにあはれに↓欠
類(譚)の(32)かたき侍(神)(33)比丘ノ比丘の(宮・譚・神・版)ゆかの
ほ(34)か(神)の(35)外(神)(36)なにと↓なる(為)類(神・版)か
何(37)も(神)の(38)葉(神)(39)たてまつり奉り(神)(40)この事は↓此
を(41)木の(神)類(神)(42)の(43)たけなはなを(44)いせし↓花
を(45)愛せし(神)(46)木のもとに↓木のもとに(譚)木の下に(神)(47)あ
り(48)なとも↓有と(神)(49)見え↓みえ(譚・神・版)(50)昔↓
むかし(譚・神)(51)を(52)はし(神)(53)侍めるは↓侍るめるは(神)
か(54)ね↓金(神)(55)侍めるは↓侍るめるは(神)

かゝるに、この人なにもたたるものにかは、つゆはかりの心もは
たらき侍へき。猶々うらやましく侍。もろこしにまかりて侍しに
も、さらになにもなくて、けさとばかりもちたる人せうく
みへ侍き。猶ほとけの御国にさかひちかき国なれば、あはれにもか
ゝるよと思ひあはせられ侍き。また、人おとをさかる事いみしくた
うとく侍。なにわさにつけても、ひとり侍はかりすみたる事はな
し。むかしの高僧のあとをたつぬれば、みなかやうにのみ侍にや。
猶々あはれに侍。うたさえいうに侍しそ。

〔校異〕(1)この人↓此人(譚・類・版)(2)なにと↓なは(譚)欠文(神)
(3)侍へき↓侍しと(神)(4)猶々うらやましく↓なを(譚)浦山
しく(神)(5)もろこし↓唐土(神)(6)さら(神)に(神)更(神)に(神)
(7)なにと↓何(神)(8)けさと↓計(神)(9)はかり↓鉢(譚・類・版)袈
婆と鉢(神)(10)もろこし↓計(神)(11)もち↓鉢(譚・類・版)袈
婆と鉢(神)(12)はかり↓計(神)(13)あはれ↓哀(神)
(14)また↓又(神)(15)人おとをさかる↓人をとをさかる(宮・)
譚・類・版)人を遠さかる(神)(16)ひとり↓独(神)(17)はか
り↓計(神)(18)あをたつぬれば↓跡を尋ぬれば(譚)跡を尋
れは(神)(19)みな↓皆(神)(20)猶々うたさえ↓猶々うたさえ(譚)侍
(21)うたさえ↓侍(神)(22)侍るに社(神)侍にこそ(類・版)侍
しそ↓侍とそ(譚)侍るに社(神)侍にこそ(類・版)侍

七、清水のはしのしたの乞食の説法事

昔、清水のはしのしたに、こもにてあやしみのあるるものゝ、
ひるはちにてゝかまたふりといふことをたてゝものをこひて
よをわたるありけり。こしには、こものきれをまきてそ有ける。か

きりほとに、ときの大なる人いみしく心をいたして仏事する事あ
りける。たうしは、時にとりてたうときこゆる人にてそおはしけ
る。このさかまたふりのそう、にはたゝすみて、事のこくけんお
いみしくうかゝひたりけに侍ければ、さやうのこちしきかたは人な
とは、かやうの所にはみへくる事なればこそなど、人々は思ける
ほとにすてに事よくなり侍ける。この僧、日ころのすかたにて日
かくしのまよりあゆみりてかうさのほりにけり。あれはいかに
とめもはつかなるわさかなとあやしみあひたりけれと、やうこそは
あるらめとて、ほうようなとしてはしまりにけり。

〔校異〕(1)昔↓むかし(神)(2)はしのしたに↓橋の下に(神)(3)い
ゑる↓家(譚・神・類・版)(4)ひるは↓昼は(神)(5)い
いて↓つちにいて(譚・神・類・版)つちにいて(神)(6)さかまた
ふり↓さるまたふり(譚・神・類・版)さるまたふり(神)(7)いふことをたてゝ
いふ事をたて(譚)云事立て(神)(8)ものをこひてゝものゝ
こひて(宮)物を乞て(神)(9)をわたる↓世をわたる(譚)
世を渡る(神)(10)あり↓有(神)(11)こし↓腰(神)(12)き
れ↓切(神)(13)有ける↓ありける(為)宮(14)かゝり↓かゝ
る(諸本)(15)ときの↓時の(神)(16)ありける↓ありける(為)
(17)たうし↓導師(譚・神)(18)きこゆる↓聞ゆる(神)
(19)にてそ↓にて(神)(20)この↓此(神)(21)さかまたふり↓
さるまたふり(神・類・版)(22)さう↓僧(神)(23)には↓庭
に(神)(24)こくけんお↓こくけんを(宮・譚・神・類・版)こく
(25)こくけんお↓こくけんを(宮・譚・神・類・版)こく
はにこそ↓なればこそ(譚・神・類・版)(26)かたは人↑かたは人(神)(27)なれ
はにこそ↓なればこそ(譚・神・類・版)(28)思ける↓思ひける
(29)思ける↓思ひける(神)(30)侍ける↓侍けるに(諸本)(31)この↓此(神)(32)
日ころの↓日比の(神)(33)すかた↓安(神)(34)日
かくしのま↓日かくしの(神)(35)ありて↓ありて(神)(36)日
かうさのま↓日かくしの(神)(37)ありて↓ありて(神)(38)ほう
(38)ほうよう↓法用(神)(39)はしまりに↓はしまりに(譚)

さて、説法いひしらすいみしく昔のふるな尊者かたちをかくして
きたりたまへるかなといひあつかふほとに侍けり。我もさめくと
なきけり。この導師すへかりつる人も、あめしつくとなきけり。み
すのうちにはのほととは、所せきほとにそ侍ける。さて、なみた
おしのこひて、かうさよりおり給ければ、このあるしも、たいめん

せんとおもひ、人々もそのよし思けるほとに、⁽¹⁵⁾おりはてければ、⁽¹⁶⁾や
かてれいのさかまたふりたて、⁽¹⁹⁾くるひいて、⁽²⁰⁾まきれにけり。その
後は、あしき事しつとやおもひたまひけむ、⁽²³⁾かきくらしうせにけ
りとなん。いかにまた人にはあらさきけりとそ人々もいひあひた
りける。けに、たゞにはあらさきける人にこそ侍けれ。されは、止
観の中には、徳をかくさむとおもは、⁽³¹⁾そら物くるひをすへしな
と侍そかし。ほかのふるまひは、⁽³³⁾ものさはかしきにかたとりけめと
も心のうちは、⁽³⁴⁾いかばかり諸法空寂のことばりに住しておはしけん
と、たうとく侍り。

〔校異〕(1)説法諸法(神・版)(2)きたりたまへる来り給る(神)
(3)この此(神)(4)導師導師(宮・譚・神)(5)あめしつ
く雨傘(神)(6)うち中(神)(7)にはの庭の(譚・神・
類・版)(8)さて扱(神)(9)おしのかひてをしのこひて
(譚・神・類・版)(10)かうさかう座(神)かう坐(類・版)
(11)おり給ければおりてければ(神)(12)この此(譚・類・
版)(13)たいめん対面(神)(14)せんせむ(為・宮)(15)思
けるおもひける(譚・神・類・版)(16)おり折(神)(17)思
はてはへて(譚)(18)やかて欠文(譚)(19)さかまたきか
また(譚)さるまた(神・類・版)(20)たてて立て(神)(21)
いていて(為)出て(神)(22)その後其後(宮)その
ち(神)(23)とやと(神)(24)おもひたまひおもひ玉ひ(譚)
思ひ給ひ(神)(25)けむけん(為・宮・譚・神・類・版)(26)
人には人に(神)(27)あらさきけりとそあらさめりと(神)
(28)いひ云(神)(29)こそ社(神)(30)中には中に(神)
(31)かくさむかくさん(為・宮・譚・神・類・版)(32)物も
の(為・宮)(33)もの物(神)(34)ことばり理り(神)(35)け
んけむ(神)侍り侍りき(神)

八、おしのまねしたる上人のまことの人に法文云事

中比、あつまのかたに、⁽¹⁾国々をまはりて物もいはて、⁽²⁾ものをた
きてかたのことくものなとくひてくふをしなるそうありけり。いか
にも、けにもいはいぬものとはおほえす。たゞいつはれる事とそみ
えける。またす。たことさまも、⁽³⁾いみしくたうとなつかしそ侍
ける。ある僧この事をあやしみて、⁽⁴⁾いみしくい物なとよういし

て、⁽¹⁵⁾そもこのたひうき世をいて給へきまことの道は、⁽¹⁶⁾いか侍
え侍へき。たゞ、⁽¹⁷⁾一くちのたまはせよかし。人の心のいさ、⁽¹⁸⁾かもつ
き侍らんは、⁽¹⁹⁾いみしき御功德にこそ侍らめといひけれと、⁽²⁰⁾耳にもき
いれす。たちはしりていてけるを、⁽²¹⁾はるかにしりしたひていか
てかさはかりの心さしをはうしなひ給へき。かならず身におほしつ
めたらむ事ひとつひすてをばせよといひければ、⁽²²⁾かへりて豈離
伽耶別求常寂非寂光外別有娑婆とそいひすて、⁽²³⁾さりにける。

〔校異〕(1)かたに方に(神)(2)国々を国々お(為)(3)物も
の(為・宮)(4)ものを物を(譚・神・類・版)ものお(為)
(5)くひてくふこひてくふ(為・宮・譚・神・類・版)乞て食
(神)(6)そう僧(宮・譚・神・類・版)(7)もの物(譚)
(8)いつはれる偽れる(神)(9)みえける見えける(為・宮
・神・類)みえにける(譚)(10)またすた又姿(神)(11)あ
る僧有僧(神)(12)この事此事(譚・神・類・版)(13)く
い物食物(神)くひものともよめる(譚)(14)ようい用
意(神)(15)そも抑(神)(16)このたひ此たひ(譚・類
・版)此度(神)(17)うき世をうき世(譚)憂世を(神)
(18)侍え心え(諸本)(19)のたまはせの給はせ(神)(20)い
さかもいさかも(神)(21)こそ社(神)(22)いひけれと
云けれ(神)(23)きいれす聞入す(譚)入す(神)(24)た
ちはしりてたちはしり(譚・神・類・版)(25)いてける出
けるを(神)(26)はるかにに(譚)(27)すて捨て(神)
(28)をばせよおはせよ(譚)(29)ければけれく(類・版)類
徒本では「は力」と傍記(30)かへりてみかへりて(為・宮)
(31)いひすていひすて(宮)云捨て(神)(32)さりに去(神)

まことにいみしくたうとく侍ける事也。⁽¹⁾天台宗法文のたましいた
これにて侍にこそ。かやうに、⁽²⁾つねにおもひけん心のそこはいか
はかりきよくすみわたたりて侍けん。このふみの心は、⁽³⁾このうきよの
ほかに、⁽⁴⁾へちに仏の国なし。まといひの人のまへには、⁽⁵⁾あやしの木草
しけりたる、⁽⁶⁾けからはしき所とみゆれとも。さとりまなこのまへ
には、⁽⁷⁾なみのおと風のごゑみなたゑなるみのりおとなへ侍そかし。

されは、天竺晨旦のいみしき高僧⁽²⁸⁾たちは、みな繩床⁽²⁶⁾に晏座⁽²⁷⁾して定印をむすひ、まなこをもちて、かやうに觀せしかは、とくいたりこうつもりてつねに諸仏⁽³³⁾をみ、つねに六道の有さまをみるとも侍めり。かやうの事かきつくしかたく、いひいつるにもはかりあるへし。心さしあらむ人、わざとかやうの事しれらん人にたつぬへし。いまこのあつまの僧のふるまひ、あはれにおほえ侍。さても、觀念坐禪はすてによもくたり、時もすきにたりなといふ人も侍へし。かならずしもさは侍ましきにや。ひろく禪宗⁽⁴⁵⁾のふみに見えたり。

〔校異〕(1)也なり(神)(2)天台宗(神)(3)たましい(神)(4)た(神)(5)こ(神)(6)つねに(神)(7)おもひ(神)(8)き(神)(9)すみわたりて(神)(10)うき(神)(11)この(神)(12)うき(神)(13)ほかに(神)(14)へ(神)(15)まへに(神)(16)た(神)(17)け(神)(18)とも(神)(19)ま(神)(20)まへに(神)(21)ま(神)(22)ま(神)(23)た(神)(24)ま(神)(25)た(神)(26)繩床(神)(27)晏座(神)(28)高僧(神)(29)か(神)(30)か(神)(31)こ(神)(32)こ(神)(33)諸仏(神)(34)み(神)(35)つ(神)(36)つ(神)(37)み(神)(38)か(神)(39)い(神)(40)は(神)(41)あ(神)(42)か(神)(43)か(神)(44)さ(神)(45)時(神)(46)あ(神)(47)さ(神)(48)か(神)(49)か(神)(50)か(神)(51)か(神)(52)か(神)(53)か(神)(54)か(神)(55)か(神)(56)か(神)(57)か(神)(58)か(神)(59)か(神)(60)か(神)(61)か(神)(62)か(神)(63)か(神)(64)か(神)(65)か(神)(66)か(神)(67)か(神)(68)か(神)(69)か(神)(70)か(神)(71)か(神)(72)か(神)(73)か(神)(74)か(神)(75)か(神)(76)か(神)(77)か(神)(78)か(神)(79)か(神)(80)か(神)(81)か(神)(82)か(神)(83)か(神)(84)か(神)(85)か(神)(86)か(神)(87)か(神)(88)か(神)(89)か(神)(90)か(神)(91)か(神)(92)か(神)(93)か(神)(94)か(神)(95)か(神)(96)か(神)(97)か(神)(98)か(神)(99)か(神)(100)か(神)

九、あつまのかたに不輕おかみける老僧の事

中ころ、あつまのかたに、としいとたけたるひしりのいひしらすきたなけなるかかみななくき物けかれたるありけり。みとみる人をゝかみて、我深敬汝等。不敢輕慢所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏。の文をなんとへける。おかむとても、なをさりのけなし。

まことをいたしてそ、みえける。いかにもたゝにはあらず。ふかく思ひいたる人なるへしと見えけり。さて、人などのあはぬ所にては、いとまをゝしみて、いとやくそはしりける。あしななどには、ひさまてつちともしみつきて、ひたいてもつちかたにてそ侍ける。いかなる所をまきはすおかみければ、さこそは侍けめ。おもひけん心のそこふかゝるへしとおほえて、きくもかしこく侍。この国には、なにとならはして侍ける事や覽、七月十四日にそ、たかきいやしきもなく、このつとめおほし侍。たゝのときは、いとたたくみえ侍にや。これは、釈迦如来昔不輕⁽²⁸⁾といはれ給しとき、しそめ給けるおこなひなりければ、いつとなくも侍へき事にこそ侍めれ。されは、證如聖などは、このつとめをしていゑことにありきたまひしそかし。あるときは、門にてつねならぬにほひをかくなとみゆれば、たのもしくそきこゆる。

〔校異〕(1)中ころ(神)(2)ひしり(神)(3)かみ(神)(4)かみ(神)(5)かみ(神)(6)かみ(神)(7)かみ(神)(8)かみ(神)(9)かみ(神)(10)かみ(神)(11)かみ(神)(12)かみ(神)(13)かみ(神)(14)かみ(神)(15)かみ(神)(16)かみ(神)(17)かみ(神)(18)かみ(神)(19)かみ(神)(20)かみ(神)(21)かみ(神)(22)かみ(神)(23)かみ(神)(24)かみ(神)(25)かみ(神)(26)かみ(神)(27)かみ(神)(28)かみ(神)(29)かみ(神)(30)かみ(神)(31)かみ(神)(32)かみ(神)(33)かみ(神)(34)かみ(神)(35)かみ(神)(36)かみ(神)(37)かみ(神)(38)かみ(神)(39)かみ(神)(40)かみ(神)(41)かみ(神)(42)かみ(神)(43)かみ(神)(44)かみ(神)(45)かみ(神)(46)かみ(神)(47)かみ(神)(48)かみ(神)(49)かみ(神)(50)かみ(神)(51)かみ(神)(52)かみ(神)(53)かみ(神)(54)かみ(神)(55)かみ(神)(56)かみ(神)(57)かみ(神)(58)かみ(神)(59)かみ(神)(60)かみ(神)(61)かみ(神)(62)かみ(神)(63)かみ(神)(64)かみ(神)(65)かみ(神)(66)かみ(神)(67)かみ(神)(68)かみ(神)(69)かみ(神)(70)かみ(神)(71)かみ(神)(72)かみ(神)(73)かみ(神)(74)かみ(神)(75)かみ(神)(76)かみ(神)(77)かみ(神)(78)かみ(神)(79)かみ(神)(80)かみ(神)(81)かみ(神)(82)かみ(神)(83)かみ(神)(84)かみ(神)(85)かみ(神)(86)かみ(神)(87)かみ(神)(88)かみ(神)(89)かみ(神)(90)かみ(神)(91)かみ(神)(92)かみ(神)(93)かみ(神)(94)かみ(神)(95)かみ(神)(96)かみ(神)(97)かみ(神)(98)かみ(神)(99)かみ(神)(100)かみ(神)

すへて、このふ經といふ事の心は、衆生のむねのそこに、仏性のおはしますを、うやまひおかみたまつる也。我等かやうなるまとの凡夫こそこのことはりをしらねとも、さとのまへにはいかな

るありけらまでも思ひくたすへきものなく。仏性なきものは
ひとりもなければ、このことはりをしりぬれば、あやしのとり
けたものまでもたうとからぬ事なし。されは、仏ねはんにいりたま
はむとせし時、おほきなる光をはなち給て、十方をてらし給しに地
獄のそこまてその光いたりて、光のうちにこそありて、もろくの
衆生にみな仏性ありとくはなしかば、そのくるしみみなそのこり
て、天上にむまるとそ侍める。こまかには、ねはん経にみえたり。
かの玄常上人の、とりけたものをみてこそしをかくめたまひけん、こ
の心にこそ侍けめ。いはんやわきまある人のすかたにうかひい
るたくひは、いますこしこの仏性のあらはれやすかるへき身なれ
は、ことにたうとくも侍へし。あやしのわさまでも心にいれつる
は、かならずそのおもひをとくる事なれば、この身に仏性有としり
て、とくあらはせんとおもはんに、いかてかむなく侍らん。いは
んや、これはほとけといふかたうとのちからをくはへたまへは、た
よりあるへき事也。また、かやうによつつの人に仏性のをはします
事をしりなは、人をにくみあさける事なとも、をのつからとまる
中たちともなるへし。よなは、仏をいたきてねふり、あさな
くは仏とくにおくと傳大土のときたまへるは、たのもしくそき
こゆる。心さしのあらむ人、こまかにたつねならふへし。このこと
をつねに心にすてさらむ人は、女人なりとも男子となつく。悪人な
りとも善人といふへしなと経には侍めるは、正法のいのちすてにの
とにいたれり。いかてかおこたりて、いたつらにかけをすくさんや。

(校異) (1)このふ経↓不輕(神・類・版)ふ給(譚)(2)いふ(云神)
(3)うやまひおかみたてまつる也↓敬(神・類・版)ふ給(譚)(4)こ
とたり(神・類・版)ふ給(譚)(5)まへに↓前に(神・類・版)ふ給(譚)
(6)あきらけ
・版(8)まても↓迄(神・類・版)ふ給(譚)(7)そなえて↓そなへて
(9)みな↓皆(神・類・版)ふ給(譚)(10)なけれは
↓なきは(譚・神・類・版)ふ給(譚)(11)ことたり↓理(神・類・版)ふ給(譚)
(12)しり
(神・類・版)ふ給(譚)(13)とりけたもの↓とりけた物(為・類・版)ふ給(譚)
(14)いりたまはむ↓いりたまはん(為・類・版)ふ給(譚)(15)光を↓光お(為・類・版)ふ給(譚)
(16)てらし↓照し(神・類・版)ふ給(譚)(17)そこ↓底(神・類・版)ふ給(譚)(18)光を↓光お(為・類・版)ふ給(譚)
(19)その↓其(神・類・版)ふ給(譚)

※
せき

(19)いたりて↓至りて(神・類・版)ふ給(譚)(20)光の↓光りの(神・類・版)ふ給(譚)
(21)うち
(22)こあらりて↓声有(神・類・版)ふ給(譚)(23)ありとく
(24)く
(25)みえたり↓みえたり(神・類・版)ふ給(譚)(26)のそりて↓そり
(27)みえたり↓みえたり(神・類・版)ふ給(譚)(28)か
(29)みえたり↓みえたり(神・類・版)ふ給(譚)(30)たまひけん
(31)この心↓此心(神・類・版)ふ給(譚)(32)侍
(33)わきまある↓わきまある(神・類・版)ふ給(譚)(34)あ
(35)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(36)いれ↓いれ(神・類・版)ふ給(譚)
(37)あ
(38)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(39)あ
(40)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(41)あ
(42)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(43)あ
(44)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(45)あ
(46)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(47)あ
(48)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(49)あ
(50)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(51)あ
(52)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(53)あ
(54)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(55)あ
(56)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(57)あ
(58)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(59)あ
(60)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(61)あ
(62)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(63)あ
(64)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(65)あ
(66)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(67)あ
(68)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(69)あ
(70)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(71)あ
(72)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(73)あ
(74)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(75)あ
(76)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(77)あ
(78)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(79)あ
(80)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(81)あ
(82)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(83)あ
(84)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(85)あ
(86)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(87)あ
(88)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(89)あ
(90)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(91)あ
(92)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(93)あ
(94)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(95)あ
(96)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(97)あ
(98)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)(99)あ
(100)あらはれ↓あらはれ(神・類・版)ふ給(譚)

Kankyo no Tomo (1)
—A Reproduction of Iwase Bunko Text
and Collation of Various Texts—
Kozo HARADA

Hidetaka HUIJISHIMA

Few commentary works have been done yet on *Kankyo no Tomo* which was composed at the beginning of Kamakura Era. In order to expect a precise modernized translation we must begin by establishing a precise text. So we have reproduced Iwase Bunko text which seems to be the best of all texts and, by investigating and comparing several texts and checking up the differences, enumerated the different parts. We hope that we shall make a small contribution to the progress of the commentary work of the book.